

新石器化と都市化のはざま

—イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の第一次発掘調査(2022年)—

小高 敬寛 金沢大学国際基幹教育院准教授
 前田 修 筑波大学人文社会系准教授
 三木 健裕 東京大学総合研究博物館特任助教
 早川 裕弐 北海道大学地球環境科学研究院准教授
 ペルウィーン・イエウエル イラク・クルディスタン地域政府スレーマニ文化財局局長
 フセイン・ハマ・ガリーブ イラク・クルディスタン地域政府スレーマニ文化財局局長

Between Neolithization and Urbanization: Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan, the First Season (2022)

ODAKA, Takahiro Associate Professor, Institute of Liberal Arts and Science, Kanazawa University
 MAEDA, Osamu Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
 MIKI, Takehiro Project Assistant Professor, The University Museum, the University of Tokyo
 HAYAKAWA, Yuichi S. Associate Professor, Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University
 YEWER, Perween Staff, Directorate of Antiquities and Heritage in Slemani, KRG
 HAMA GHARIB, Hussein Director, Directorate of Antiquities and Heritage in Slemani, KRG

1. はじめに

後期新石器時代の前7千年紀半ばを過ぎた頃、新石器化と都市化のはざまの時代にあつて、これら人類史上の二つの革新を橋渡しする出来事が起きた。「肥沃な三日月地帯」で新石器化を遂げていた人びとが、それまで荒野に過ぎなかったメソポタミア低地の開発に乗り出したのである。これにより、やがて文明社会が花開く都市化の舞台が整えられ始めた。ところが、そ

のプロセスの実態はほとんど分かっておらず、とりわけ考古資料に基づく実証的な研究は滞っている。

この課題に取り組む上で、イラク・クルディスタン地域南東部のシャフリゾール平原は恰好のフィールドである。「肥沃な三日月地帯」の東翼、ザグロス山麓の一角に位置するこの平原は、ティグリス河の支流ディヤラ川を介して、メソポタミア低地へと通じているからだ(図1)。

そこで、私たちは新石器化から都市化への移行プロ

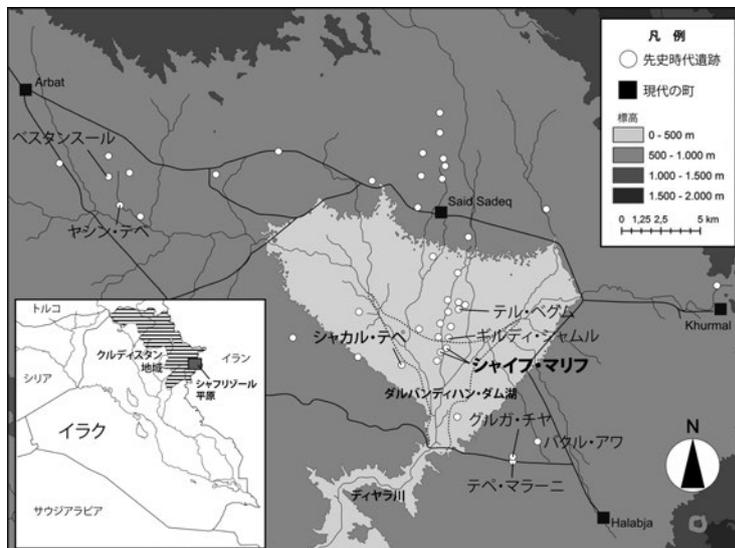


図1 シャフリゾール平原と先史遺跡の位置



図2 シャイフ・マリフ遺跡のオルソ補正画像と等高線(0.1 m 間隔)

セスをシャフリゾール平原で定点的に追跡するため、先史遺跡調査を実施してきた。

2. これまでの経緯

シャフリゾール平原では、私たちが標的とする前7千年紀半ば以降の考古学的証拠が希薄である。特に、前6千年紀前葉までの確たる考古資料はみつかっていなかった。

そこで、私たちは数年にわたる予備的な調査・研究を行い、シャフリゾール平原東部、ダルバンディハン・ダム湖畔に立地するシャイフ・マリフ(Shaikh Marif)遺跡において、この考古学的証拠の時期的な「空白」を埋める可能性を見出した(小高ほか2018; Odaka et al. 2019)。2019年9月、その検証を目的とした発掘調査に着手する予定であったが、その年はダム湖の水位が高く、遺跡がほぼ水没していた。そこでやむなく、同じシャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ(Shakar Tepe)という別の遺跡の発掘調査を実施し、幸いなことに「空白」の一部である前6400~6000年の文化層を検出することに成功した(小高ほか2020, 2021; Odaka et al. 2020)。

その後、コロナ禍などの影響で現地での調査は滞ってしまったが、2022年夏、ようやく再開することができた。今回、発掘調査の対象としたのは、元来の狙いであったシャイフ・マリフ遺跡である。

3. シャイフ・マリフ遺跡

シャイフ・マリフは、ダム湖へと流れる涸河ワディ・シャムル沿いに所在するテル(遺丘)型の遺跡で、バグダードのイラク国立博物館によって1943年に登録されている。2012年、シャフリゾール平原の遺跡分布調査を進めていたシャフリゾール・サーヴェイ・プロジェクト(SSP)の調査団は、ワディ・シャムルの流域を集約的に踏査し、この遺跡の周辺で新たに複数の遺丘を発見した。そのうち二つの小さな遺丘はシャイフ・マリフの遺丘と近接しており、現地住民からまとめて「セ・タパン」(Se Tapan、「三つの丘」の意)とも呼ばれていた。そこで、私たちはシャイフ・マリフという遺跡名をこれら三つの遺丘すべてを指す言葉として用い、もともと登録されていた北側の遺丘(SSP-37)をシャイフ・マリフI、「アシュ・シャイフ・マリフ」(Ash Shaikh Marif)とも呼ばれる西側の遺丘をシャイフ・マリフII、無名の東側の遺丘をシャイフ・マリフIIIとして区別することにした(図2)。

遺跡はダム湖北岸に位置し、2019年のように遺丘のほぼ全体が水没してしまうこともあるが、2022年は湖の水位が極めて低く、湖岸は数km先まで後退していた。周囲の土地を含めて季節的に畑地として利用されており、低く緩やかな遺丘の上もトラクターで耕されている。水の侵食と耕作によって遺跡の破壊が進んでいるため、地表には多くの遺物が散布している。なかでも、シャイフ・マリフIとシャイフ・マリフII

では、青銅器時代以降の遺物と並んで、後期新石器時代のものと思しき土器片や石器が多数確認できる。私たちは、そうした資料に基づく予備的な調査・研究を行ない、シャイフ・マリフⅠは前7千年紀後半から前6000年前後、シャイフ・マリフⅡは前7千年紀末から前6千年紀前葉の間に居住されていたのではないかと予測していた(Odaka et al. 2019)。

2022年の発掘の対象としたのは、シャイフ・マリフⅡである。三つの遺丘のうち最も規模が小さく、平面形は径70mほどの不整な円形を呈し、周囲平坦面との比高差は約2mである。遺丘の北側から東側へと流れるワディ・シャムルによって他の二つの遺丘と隔てられ、西端には未舗装の道路が南北に走っている。調査時は、北北西100m先の付近に遊牧民が夏営地を構えており、遺丘頂部にも泥壁の窯やコンクリートブロックなど、最近の野営の痕跡らしきものが残されていた。

4. 発掘調査

シャイフ・マリフⅡの発掘調査は2022年8月27日から9月23日まで実施した。

最初に着手したのは、遺丘頂部の平坦面に4m四方の発掘区を二つ、1m幅の土手を挟んで東西に並べて設けたA区(Operation A)である(図3)。ここでは表土層直下から地山に達するまで、後期新石器時代の遺物が主体的に出土した。文化層は上から第1層から第4層に区分でき、第2層と第3層は夥しい量の後期新石器時代の遺物を包含していた。半面、最下層の4層は遺物の出土量が少なく、現地表面より1.3m程の深さで無遺物の地山に至った。

A区では、遺構として少なくとも14基の土坑が確認できた。但し、その多くは表土層直下から掘り込まれており、後期新石器時代よりも新しい時代のものと考えられる。後期新石器時代の所産と思しき遺構はわずかで、そのうちの 하나가A区西側、第1層で検出された炉址(Str. 001)である。径0.7mほどの円形の焼けた硬化面の上に、炭化物を含む焼土が薄く堆積していた(図4)。その直下にはより大きい、平面が2.0×1.5mほどの矩形を成す深さ約0.3mの土坑(Str. 002)も存在していたが、形状や覆土、出土遺物からその性格や機能は特定できなかった。A区において最も注目すべき後期新石器時代の遺構は、第4層東側で検出された深い土坑(Str. 013)である(図5)。この土坑は深さ2.8mあたりで水が湧き出したため、底面ま



図3 A区の発掘調査風景



図4 Str. 001



図5 Str. 013

で掘り下げることができなかった。平面形は円形で、上端は径1.0mほど、発掘停止面は径0.7mほどを測る。壁面には少なくとも六つの窪みがあり、おそらく掘削時の足掛けと思われる。こうした特徴から、この土坑は井戸として掘られたものと推定できる。

続いて調査を実施したB区(Operation B)は、遺丘西側の緩斜面、A区の西15mの位置に設けた。東西4m×南北2mの範囲を発掘し、ここでも表土直下から地山に到達するまで、後期新石器時代の遺物を主体



図6 Str. 202



図7 出土土器片

的に包含する文化層が検出された。その厚さは0.9～1.0 mほどで、地山の高さは地表面同様、東に向かってやや下っていた。発掘区東寄りから数多くの遺物が出土したものの、特筆すべき遺構はみつからず、後世の土坑などがいくつか認められるにとどまった。

最後にあげる発掘区は、遺丘南側の緩斜面、A区に南15 m離し、東西2 m×南北4 mの規模で設けたC区(Operation C)である。やはり表土直下から地山に至るまで、後期新石器時代の遺物を主体的に包含する文化層が堆積していたが、その厚さは薄く、0.5 mほどであった。2基の土坑が検出され、うち1基(Str. 202)は径1.0 mほどの円筒形に深く掘り込まれていた(図6)。調査では約2.5 mの深さまで掘り下げたもの

の、底面に到達することはできなかった。壁面には3つの窪みが認められ、足掛けであろうと推測される。こうした諸特徴はA区のStr. 013と共通するため、本遺構もまた井戸址であろうと考えられる。出土遺物から判断すると、後期新石器時代に造られたと考えてよさそうだ。

5. 出土遺物

出土遺物中、数量的に大半を占めたのは後期新石器時代の土器片である。これらの多くは、砂粒を少量含む胎土で作られ、丁寧にナデ調整された淡黄色ないし明橙色の器面をもち、しばしば刻文装飾が施されていた(図7：A、B)。こうした特徴は、北メソポタミア

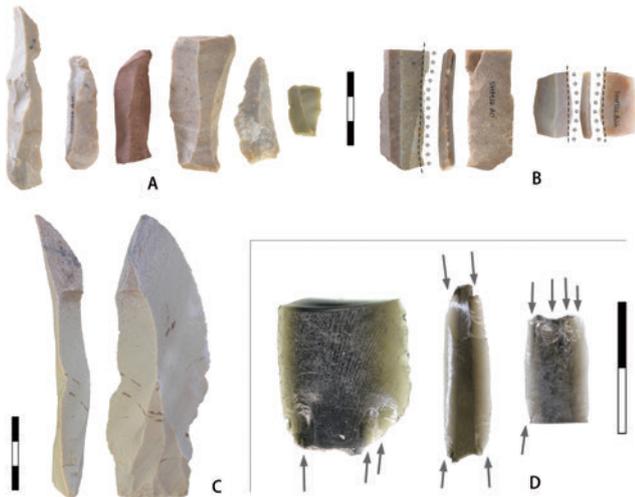


図8 出土石器

で知られるハッスーナ標準土器(Hassuna Standard Ware)と呼ばれる型式と符合する。但し、詳しく観察すると胎土の精粗などからいくつかのヴァリエーションに分類できそうであり、そこには北メソポタミアとは異なる、シャフリゾール平原ないしその周辺の地域性が表れているように見える。同じく後期新石器時代のものと思しき土器には、他にスサや鉍物粒を多く混和した粗製の土器が認められる。器面は淡黄色や橙色を呈し、粗いナデで調整され、装飾が施されることは稀である(図7:C、D)。

シャイフ・マリフⅡにおいて、後期新石器時代の土器アセンブリッジに時期的な変化が認められるか否かについては、今後の本格的な分析を待たねばならない。但し、帰属年代については、型式学的な特徴からみて、前6000年を前後する数百年の間に収まるのではないかと今のところ推測している。

出土した石器に時期的な変化が認められないことは、文化層の年代幅が比較的狭いことの傍証になるかもしれない。そのほとんどは、遺跡周辺で採取可能なチャートを用いた剥片石器であった(図8:A)。これには、3点の大型石刃も含まれる(図8:C)。定型的な細石器や砲弾形の石刃石核は皆無で、ごく少数出土した押圧剥離石刃(図8:B)は搬入品と思われる。こうした石器インダストリーは、シャカル・テベ遺跡の場合と一定の共通性を示しており、ザグロス山麓の新石器時代に広くみられるムレファティアン(Mlefaatian)の石器製作伝統とは一線を画す。黒曜石製石器は、出土石器の2.5%にとどまったが、3点のサイド=ブロー・ブレイド=フレイクと6点のCT石刃(図



図9 出土石製品・土製品

8:D)が含まれる。これらは後期新石器時代、北メソポタミアを中心に分布する石器だが、本例は地理的に最南東の出土例である。

他に、おそらく後期新石器時代の所産であろう遺物として、特異な形状をした小型の石製品(図9:A)や土製品(図9:B)、土製紡錘車(図9:C)などが出土した。また、表土層や後世の土坑からは、青銅器時代以降の遺物もみつかった。

6. 地形計測

2022年はダム湖の水位低下により、通常は湖水が広がっている範囲の多くが干上がっていた。ダム建設以前の地形に迫ることのできる、絶好の機会といえる。そこで今回は、発掘調査に不可欠な遺跡の精細な地形だけでなく、周囲のより広範な地形を計測することにした。特に、これまで湖の対岸にあったシャイフ・マリフ遺跡と2019年に発掘調査したシャカル・テベ遺跡との間が露出していたため、その範囲を主たる計測対象範囲とした。

結果、約6km²の範囲をカバーする1m間隔の等高線を生成することができた(図10)。二つの遺跡を取り巻く地形、とりわけ周辺河川の流路が露わになり、遺跡間の関係性を考察するうえでの貴重な情報が得られた。

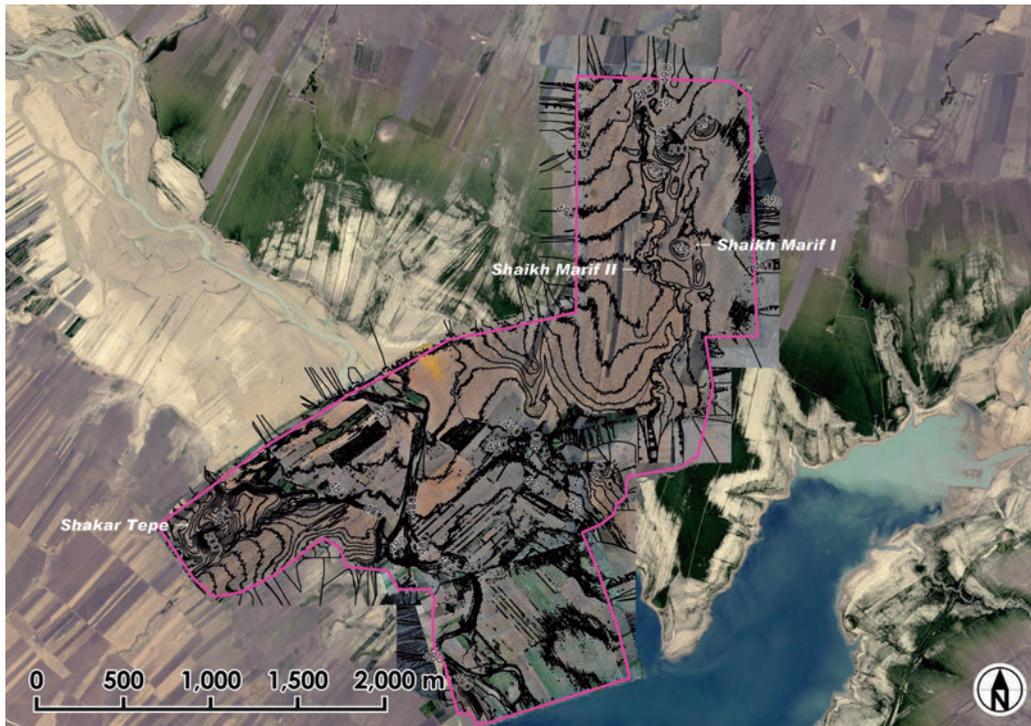


図10 シャイフ・マリフ遺跡周辺のオルソ補正画像と等高線(1m間隔)

7. まとめと展望

シャイフ・マリフⅡの発掘調査により、後期新石器時代の豊富な考古資料を収集することができた。その確たる年代は現在進めている理化学的測定の結果を待たねば明言できないが、おそらく前6000年を前後するものと思われる。もし、この推定が正しければ、シャカル・テペ遺跡での成果に続いてシャフリゾール平原における考古学的証拠の「空白」の一部を埋めることになり、私たちの目的である新石器化から都市化への移行プロセスの定点的追跡が大きく前進する。

地域性をみせる出土遺物や井戸址をはじめとする検出遺構は、そのプロセスを理解するうえで重要な研究資料となりうる。今後、これらの詳細な分析によって、物質文化の内実を明らかにし、広範な時空間的枠組みの中に正しく位置づけ、他地域との通時的な関係を考察していきたい。

そして、層位学的情報を伴う資料をより充実させるべく、シャイフ・マリフⅠの発掘に臨むとともに、シャイフ・マリフⅡやシャカル・テペ遺跡の調査も継続していきたい。これらの成果を統合する際、今回把握することのできた広域な地形は、多くの示唆を与えてくれるであろう。

なお本調査は、日本学術振興会科学研究費・新学術

領域研究(課題番号:21H00003)、基盤研究(B)(課題番号:19K01111、21H00590)、基盤研究(C)(19K01111)などにより実施した。

参考文献

- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuyse and S. Mühl 2019 From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.
- ・ 小高敬寛・早川裕式・O. ニウウェンハウゼ・S. ミュール 2018 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の予備調査(2012~2017年)ー」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』12-16頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 小高敬寛・O. ニウウェンハウゼ・金田明美・K. ラシード 2014 「文明前夜のメソポタミア東縁部ーイラク・クルディスタン、テル・ベグム遺跡の発掘調査(2013年)ー」『第21回西アジア発掘調査報告会報告集』53-58頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕式・西秋良宏・N. A. ムハンマド・K. ラシード 2020 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第1次発掘調査(2019年)ー」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』15-20頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕式・西秋良宏・N. A. ムハンマド・K. ラシード 2021 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査(2019~20年)ー」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』14-19頁 日本西アジア考古学会。